

稲作情報

(土づくり・育苗管理)

令和7年度 第5号

令和8年3月16日発行、福島県会津農林事務所喜多方農業普及所、JA 会津よつば、喜多方市、北塩原村、西会津町

◎ ケイ酸資材及びたい肥等有機物を施用し、高温や倒伏に負けない稲体をつくり、高品質・良食味米を生産しましょう！

◎ 出穂期が高温時期(8月上旬)にならないよう早植えを控えましょう！

1 育苗管理

種子の準備

- 種子は必ず塩水選(表1)を行い、未消毒種子や自家採種種子は、更に薬剤等による種子消毒を実施し、ばか苗病等の発生を防止しましょう。
- エコホープDJで種子消毒する場合は、効果を安定させるために水温を10℃以下及び30℃以上にしないようにしましょう。また、温湯消毒は、水温60℃で10分間を厳守しましょう。

表1 塩水選水 10リットルの目安量

	比重	食塩	硫安
うるち	1.13	2.1kg	2.7kg
もち	1.10	1.6kg	2.0kg

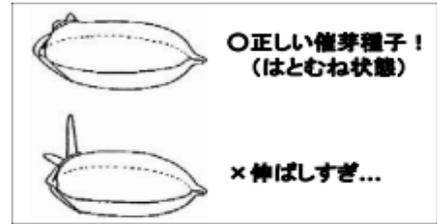


図1 正しいハト胸催芽もみ

(2) 浸種(水浸し)

- 浸種開始日は、苗の種類や育苗日数を基に移植日と播種日から逆算して設定しましょう。
- 水温は10~15℃とし、積算水温で100~120℃(浸種漬水温×日数)を目安にしましょう。
- ひとめぼれ、天のつぶ、五百万石は、休眠が深いため1~2日程度長く浸種し発芽を揃えましょう。
- 水量は、種籾重量の2倍以上とし、浸種3日目以降は1~2日毎に水を入れ替え、籾がハト胸(発芽長1mm)状態(図1)になるように、確認しながら催芽しましょう。

(3) 播種

- 苗の種類に合った播種量で、育苗日数と移植日から播種日を決めましょう(表2)。

(4) 温度管理

- 温度計は、苗の近く(高さ)に設置し、育苗中は日中28℃を超えないように管理(表3)し、幼芽長が5~10mmになったら被覆資材を外して緑化し、硬化後は換気をこまめに行いましょう。特に快晴の日は、朝早めにハウスを開けるとともに、小さいハウスは温度が上昇しやすいので注意しましょう。

(5) 水管理

- 苗のかん水は、地下水や水道水等のきれいな水を使用し、夕方以降のかん水は苗が軟弱徒長しますので控えましょう。

表2 苗の種類と播種量等の目安

	播種量 (乾籾g/箱)	育苗日数 (日)	草丈 (cm)	葉齢 (葉)	10a箱数 (箱)
密苗	250~300	15~20	10~15	2.0~2.3	6~8
乳苗	200~300	6~10	6~7	1.5前後	15~20
稚苗	180~200	20~25	10~13	2.2~2.5	18~20
中苗	100	30~35	13~15	3.0~3.9	30~35

表3 育苗中の温度管理の目安

	日中	夜間
催芽・出芽時	28℃	
緑化(第2本葉展開前)	25℃	12~15℃
硬化(第2本葉展開後)	20℃	10℃

(6) 育苗中の病害対策

- 適切な温度管理と水管理で、病害の発生を抑えましょう。

表4 育苗中の主な病害と防除薬剤の例

病害名	病気の特徴	発生要因	防除薬剤(使用時期)
苗立枯病 (フザリウム)	・根や苗の地際部が褐変し、後に黄化・枯死する。 ・苗の基部や籾の周りに白色やピンク色のカビが生える。	・床土のpHが5.0以上 ・緑化期間中の極端な温度変化や10℃以下の低温 ・床土の乾燥と過湿の繰り返し	タチガレースM液剤(播種時または発芽後) ナエファインフロアブル(播種時)
ムレ苗 (ピシウム)	・2~3葉期頃に急にしおれ枯死する。 ・地際部や土壌表面にカビが生えない。	・10℃以下の低温	タチガレースM液剤(播種時または発芽後) ナエファインフロアブル(播種時~緑化期)
苗立枯病 (リゾプス)	・出芽時に籾の周囲や床土表面に白い綿毛状のカビが生じ、急速に繁殖して育苗箱全面を覆うこともある。	・出芽期の32℃以上の高温 ・緑化期以降の10℃以下の低温 ・床土の過湿 ・厚播き ・前年発生した場合は育苗箱等が第1次伝染源となりやすい	ダコニール1000(播種時~緑化期(但し、播種14日後まで)) ナエファインフロアブル(播種時)
もみ枯細菌病	・葉鞘は褐変、心葉は葉身基部が白色になり、腐敗して簡単に引き抜ける。	・罹病種子が第1次感染源となる ・播種後10日頃までの32℃以上の高温	・発生後に使用できる薬剤が無いので、予防に努める。

2 ほ場の準備

(1) ほ場の準備

- 融雪後は、田面が早く乾くように暗渠の水抜きや田面停滞水の排水を速やかに実施しましょう。また、畦塗り等により畦畔からの漏水を防止しましょう。

(2) 土壌改良資材

- たい肥や稲わら等の有機物を毎年施用し、地力を高めましょう。
- ケイ酸資材は、稲体を丈夫にすることから病虫害抵抗性や耐倒伏性を高めるとともに、受光体制が良くなり光合成能力が向上し、米の品質や食味の低下を軽減する効果がありますので積極的に施用しましょう。
- 秋落田や土壌還元が発生するほ場では、含鉄資材が根腐れの抑制や秋落ち防止に有効であることから施用しましょう。

表5 施肥窒素分量の目安

	窒素分量(kg/10a)		
	基肥	追肥	合計
コシヒカリ	4	2	6
ひとめぼれ	6	2	8
天のつぶ	6~8	2	8~10
里山のつぶ			
天のつぶ(飼料用)	8~10	2	10~12
ふくひびき(飼料用)	7~8	2	9~10

(3) 施肥

- 基肥窒素は、品種別の分量を基にほ場の地力に合わせて調整しましょう。
- 側条施肥は、肥料の利用率が向上することから2割程度減らしましょう。
- 稲を刈り取らずに、籾ごとすき込む場合は、倒伏等が助長されることから土壌診断を行い減肥しましょう。

- 休耕していたほ場では、雨水等によりカリが流出し不足していることがあります。また、稲わらをほ場外へ持ち出しているほ場でもカリが低下していますので、土壌分析を行い交換性カリ含量の目安25mg/10aを確保できるように施肥しましょう。

※ 農薬は、使用回数や使用量等に留意し、ラベルをよく確認して使用しましょう。水は貴重な資源です。用水のかけ流しは控えましょう。

★ 本情報の内容や米づくりに関する問い合わせ・相談はこちらへどうぞ！

会津農林事務所喜多方農業普及所

TEL 0241-24-5745

J A会津よつば 喜多方営農経済センター営農振興課

TEL 0241-21-1801